

# 「友好の原点を歩く旅」

— 検証と謝罪と誓いと —

藤井 正義

2008年7月9日から7月13日までの5日間、「社団法人日中科学技術文化センター」と「方正友好交流の会」の共催で「友好の原点を歩く旅」と銘打つ訪中団が結成され、中国東北地方（旧満州）の各地を訪問した。関連する文章は多くの参加者から本号に寄稿されているが、私もその一員として若干の言葉を添えさせていただく。

訪中の目的はハルピン市方正県にある「方正地区日本人公墓」をはじめ幾つかの公墓に墓参し、日中両国の戦争犠牲者の霊を鎮めるとともに、731部隊罪証陳列館、撫順戦犯管理所、平頂山惨案遺址記念館、9・18事変博物館など各種戦争記念館を訪ねて歴史認識を新たにし、日中友好交流促進の一助とするためである。

大類善啓事務局長を団長とする一行は、社団からは木村直美理事の参加を得、「方正友好交流の会」、並びに、その他の各方面から日中友好に深い関心もつ方々の参加を頂いて、総勢16名に達した。

一行は7月9日朝、成田を発ち、大連経由で夕方ハルピンに着き、同市のホテルで旅装を解いた。

— 戦禍を被う悠久の大地 —

翌10日朝、バスで最初の訪問地である方正に向かう。市街地を離れてまず目を奪ったのは、ほぼ一直線に伸びる高速道路の両側に果てしなく広がる緑一色の玉蜀黍畑である。大人の背丈を遙かに凌ぐほどに生育した太い茎の根元に目をやれば、肥沃な黒土が露出している。

あの敗戦の混乱の中で、関東軍に置き去りにされ、路頭に迷った開拓民は数知れず、180キロ離れた方正県から徒歩でハルピンまで逃避行を試みた。だが、それは容易なことではなく、大部分は厳寒の方正で越冬を余儀なくされ、数千人がその最期をこの地で迎えた。平和な今日、目の前に豊かに展開する玉蜀黍畑からその悲劇を思い起こすことは難しい。だが、飢えた軍国主義日本が、食料の供給と対ソ防衛布陣という一挙兩得的侵略戦争遂行のために開拓民を利用したことを思うと強い怒りを覚える。

— 感謝と友好と —

一行は方正に到着後、ただちに県人民政府を表敬訪問した。人民政府常任委員の郭玉志氏、外事弁公室主任の王緯新氏ほか数人の幹部から熱烈な歓迎のことばを受ける。

これに答えて大類団長からは、方正はまさに「日中友好の原点」であり、方正県と交流することにより国際的友愛の精神を培いたいと返礼のことばが述べられた。日本人公墓の維持管理のため方正県側の高配に対し深甚な謝意が表され、故石井貫一氏夫人及び日中科学技術文化センターから預かった献金と、会員福久かずえさんから託された千羽鶴が贈られた。

まず、中国の烈士が眠る「革命烈士記念碑」に詣でてから、「方正地区日本人公墓」などのある「日中友好園林」に向かう。

「友好園林」は松林のなかにあり、清楚に掃き清められていた。団長から墓前に献花がなされ、参加者が交々焼香をする。新潟県村上市から来られた野田尚道住職のあげる読経の声が朗々と林間に木霊し、最後に全員が手を合わせ犠牲者の冥福を祈った。

凌辱されるより自決を選んだ500人の婦女子を祀る「麻山地区日本人公墓」、残留孤児を引き取り育てた、「中国養父母公墓」、この寒冷地に稲作技術を広めた「藤原長作先生の墓」と墓参したあと、開拓民遺品陳列館を参観し、「友好祈念」の石碑をバックにして記念撮影をする。

市街に帰る途中にある伊漢通開拓団跡は炎天下に当時のままの佇まいを残していた。家々の住人は変わっても、分厚い草葺きの屋根も、荒い土壁も、屋敷を取り巻く無骨な木柵も、往時を偲ばせる。

方正県最終の訪問先は「船着き場」だ。花崗岩の墓石はハルピンから松花江をはるばる船便で運ばれ、その「船着き場」に陸揚げされた。おそらくジャッキなどを使って苦労をともなう作業であったと思う。

翌11日から13日までは、旧日本軍の犯した罪証を検証し、中国側の寛大な対応に謝す旅であった。

#### －検証と謝罪－

ハルピン市郊外の「731部隊罪証陳列館」は、石井部隊による生体実験の行われた場所だ。ペスト菌、コレラ菌、チフス菌など細菌研究所があった広大な敷地には、証拠隠滅のため敗戦とともに破壊された当時の建物が再現されている。建物の内部には、「マルタ」と呼ばれ、細菌実験や冷凍実験、加熱実験など生体実験の材料に供された人たちの蝸人形が実物そっくりに作り込まれている。ある者は椅子にかけさせられて注射を強いられ、ある者は密閉した部屋に押し込められて加熱され、又、ある者はドライアイスのガラス箱に入れられて冷却された。その苦痛に歪んだ憎しみの顔はいかにもリアルに表現され、目を背けたくなる。黙祷。

#### －反省と謝恩－

瀋陽市から車で一時間の撫順市にある戦犯管理所は、旧日本軍の侵した罪証に対して、中国政府の人道主義が示された場所だ。休日にも拘わらず、女性の候桂花館長と数人の幹部が出迎えてくれた。館長はこの建造物の歴史を語った。

1950年に、愛新覚羅溥儀を含む日本の戦犯900名余がソ連から引き渡され、この施設に収容された。目的は、軍国主義に凝り固まった旧日本軍戦犯の再教育である。同時にそれは周恩来に代表される中国政府の人道主義発露の機会でもあった。日本人戦犯達を処刑せず、人格を尊重し、厚遇を与え、第二の故郷として住ませ、犯した罪を認識させることにより、人間改造を行った上で、1956年6月から1964年3月にかけて順次全員を解放し、帰国させた（五州伝播出版社版「日本戦犯再生の地」など中国側資料によ

る)。

事実、旧被害者国である中国側の施した、かかる想定外の処遇は、日本人戦犯達を感動させ、親中派を生み出し、後年の日中国交回復に資するところ大であったと考える。「撫順の奇跡」といわれる所以である。

#### －惨劇と不戦の誓いと、互恵へ－

平頂山への途中、道路わきから撫順露天掘り炭鉱を望見した。岩脈が露出した途轍もなく大きな摺鉢状の岩山の中腹を、鉱石運搬用のレールが地底に向かって螺旋状に降りている。もう石炭は取れないが、他の鉱石はまだあるといわれる。

「平頂山惨案遺址記念館」は平頂山への道路を登り切った場所にある。

麓の山村には500世帯、3000人の中国が住んでいた。村人の大部分がこの山麓で旧日本軍によって虐殺された。その様子が写真や絵画で展示され、館内には800体の白骨体が掘り出されたままの姿で折り重なっていた。その光景は、1937年4月、ナチの無差別爆撃で犠牲になったスペイン・バスク地方の都市「ゲルニカ」を描いたピカソの絵を想起させる。

旅の最終日、東北戦争（満州事変）勃発の地、柳条溝の近くに建つ、「9・18事変博物館」を参観した。旧満州における旧日本軍による侵略と中国側の抵抗戦線の模様が幾多の展示物で示されている。

かつて軍国主義日本は中国を侵略した。これは紛れもない事実である。今回われわれは旧満州で戦火の残した傷跡を巡り、この事実を検証した。

われわれの立場は、これら中国で犯した数々の罪状を虚心坦懐に顧みて反省し、陳謝し、不戦を誓い、日中友好交流をますます維持発展させ、ひいては東アジアの平和と安寧の秩序に資することである。このまさに「友好の原点を歩く旅」に参加できたことの意義は大きい。

けれども、このような高邁な精神に対して、「9・18事変博物館」の出口に掲げられた江沢民氏の筆になる「勿忘“9.18”」という銘は、中国側の歴史認識の頑なさを示し、政治経済文化の各面で互恵関係を目指している日中友好の交流に逆行する虞なしとしない。

<ふじいまさよし、(社)日中科学技術文化センター参与、本会事務局>